

## 藤原道長の文事——『御堂関白記』寛弘元年から（中）——

北山 円正

本稿はまず、『御堂関白記』寛弘元年正月から七月に記す、藤原道長の文事を読み解いた前稿「（上）」（本誌第五十四巻・二〇二二年三月）の補足訂正を行う。道長およびその周辺の人々の和歌を集めた『御堂関白集』がある。この歌集はすでに指摘があるところ<sup>1</sup>、詠作年次の順に和歌を配列しており、道長の事蹟をうかがう手掛かりとなる。その冒頭は寛弘元年の歌群からなり、『御堂関白記』などの古記録と内容の一致するところが多く、史料としての側面を有する。そこで『御堂関白集』を、道長の文事を知る上で重要な資料と捉え、まず二月～七月における和歌を取り上げて、検討した結果を前稿に付加する。なお、前稿で触れなかった記事についても適宜言及する。これにつづいて、『御堂関白記』寛弘元年八月以降における、藤原道長の文事に関する記事の注解を試みる。

### 補訂

#### 二月

前稿（上）五ページ上段において、六日の花山院御製への道長の返歌

「三笠山……」は、『後拾遺集』以下の歌集に見えないと述べたが、『御堂関白集』（4）にはある。訂正する。この当該贈答歌を引いておく。本文は神宮文庫本（『私家集大成 中古I』）を用いる。その傍点は日記本文との相異を示している。なお詞書については、両書の性格が異なるので傍点を付さない。

三位中将、春日の使したまふつとめて、左衛門督のもとへ遣はす。雪いみじう降るほどに

若菜摘む春日の原に雪降れば心づかひを今日さへぞやる（1）

御返り  
左衛門督

身をつめばおぼつかなきを雪やまぬ春日の原の若菜なりけり（2）

花山院より

我さへに思ひこそやれ春日野の雪間をいかで人の分くらん（3）

御返り事

三笠山雪や積むらんと思ふ間に心の空にかよひけるかな（4）

問題となるのは、春日の使いである頼通の位階と官職である。寛弘元年二月六日の時点では、正四位下右少将であり、明らかに誤っている。

三月

廿五日、己酉、雨下。早朝従伊祐宅、辰時渡仁和寺。依供養女方大般若也。……中宮御諷誦使、右近中将公信、桜色褂。右近中将頼親取授之。

……

(裏書)……従中宮賜名香。

廿五日、己酉、雨下。早朝伊祐の宅よ従り、辰の時に仁和寺に渡る。……中宮の御諷誦ふじゅの使、右近中将公信に、桜色の褂うちき。右近中将頼親取りて授く。……

(裏書)……中宮従り名香を賜ふ。

道長の正室倫子が、仁和寺において『大般若経』の供養を行い道長も参詣したことは、前稿で取り上げた。なお『日本紀略』には、「左大臣於仁和寺、供養大般若経」と、道長が催したことになる。日記によれば、娘中宮彰子から「御諷誦」が送られ、「名香」をたまわっている。『御堂関白集』には、

三月廿五日に、殿の上、御経仏など供養せさせたまふ。宮より名香たてまつらせたまふに

春霞よそにのみ立つ山辺にはたぐふ煙に心をぞやる (11)

御返り事

春霞今日の煙に添へばこそ山の錦も外には見えけれ (12)

と、「名香」のことが見えるとともに、中宮の立場ゆえ、たやすく詣でるわけには行かない代わりに、供養への思いを香の煙に託している。「殿の上」は倫子。一方返歌では、「春霞」に「名香」が添えられたので、「山の錦」が都から美しく見えるでしようにと、感謝を述べている。この「錦」は桜の花ではないか。三日後の、華山院の仰せがあつて白河での花見に従っている記事——前稿で取り上げた——が参考になる。「山の錦も」は、底本に「やまのにしにも」とある。これでは解しがたいので、妹尾氏の見解にしたがつて改めた。返歌は倫子が詠んでいるのであろうが、道長もその場において、この模様をつぶさに見ていたのではないか。ちなみに、『源氏物語』の胡蝶巻の冒頭において、紫の上がいる六条院の春の町で、船樂の遊びを行っていた折、秋好中宮が里下がりにしていたのだが、「ついでなくて軽らかにひ渡り、花をもて遊びたまふべきならねば」という理由で、気軽には出掛けられない状況を描いている。中宮彰子の立場と重なるところがあると言えよう。

四月

この月に詠まれた『御堂関白集』の和歌を取り上げる。

四月一日、齋院より

問はぬ間に春も過ぎにき夏衣今日の気色を思ひこそやれ (13)

うきこともかけて思ふな夏衣おぼつかなさのまさる気色か (14)

と、齋院選子内親王から和歌が送られてきた。二首とも齋院が詠んだよ

うにみえるが、妹尾氏の指摘のとおり14番は道長の返歌であろう。13番の「問はぬ」は、詞書の「四月一日」に着目するなら、よき季節である春を愛で楽しむ歌を送らなかったことをいうのであろう。衣更えによつて夏を実感しつつ、過ぎ去った春を惜しむ気持ちを道長に示したのである。道長は、斎院が詠う惜春の情に対して、くよくよなさいますな、「夏衣」をお召しになったご様子がよく分からず気になっていますと返している。斎院が「うきこと」を抱えていると見てとつたのであろう。なお、この贈歌を選子から中宮彰子へのもものと見る解釈もある。すなわち、この歌集は道長のみならず、周りにいる妻倫子・娘中宮彰子らの和歌も採られており、道長およびその一族をめぐる歌集と捉えることができるとする平野氏の見解である。この見解からここでは、選子が彰子へ和歌を送り、これに彰子に仕える女房らが返歌を行ったとするのである。『御堂関白集』独特の性格からすれば、この理解も十分成り立つ。今はどちらかの意見を是とするのではなく、両論を紹介しておく。以下同様。

廿よ日のほどに、殿よりいと小さき菖蒲をたてまつらせ  
たまへるをご覧して、宮より

ほととぎす待つと聞きてや菖蒲草まだうら若きねをも見るかな

御返り事

ゆたかにもあらぬ菖蒲をほととぎす待つと聞きてや初音惜しまぬ  
(16)

四月二十日を過ぎたある日、「殿」道長から「宮」中宮彰子に「小さ

き菖蒲」をたてまつり、彰子からは和歌を贈った。そして道長から返歌があった。「菖蒲」は五月五日の行事・風習と深く関わるものであり、この日に貴族も庶民も屋根に葺いた。四月二十日過ぎではまだ大きく成長していなかったものであろう。彰子詠の「ほととぎす」は夏の鳥であり、当時の人々はその鳴き声を好んだ。彰子は、まだ時期に到らない若い菖蒲を贈られて、ほととぎすの初音ではありませんが、菖蒲の若い根を見せてもらいましたと礼を述べている。父道長の贈り物から機知を見てとつたのである。対する道長は、ほととぎすの「初音」を待っておられるとうかがったので、やや早いのですが、代わりに菖蒲の初根（若い根）をお届けしましたと、説明している。気の利いたやり取りと言えよう。二人の間で繰り返されたであろう、物品や和歌の贈答の様子が知られる一例である。

## 五月

二日、乙酉、華山院宮達、可為親王宣旨。実成朝臣来仰云、依有被申院、雖不宜母、被下宣旨。冷泉院五六宮者。

三日、丙戌、以举直朝臣、令申事由彼宮。有禄。

二日、乙酉、華山院の宮達を、親王と為すべき宣旨あり。実成朝臣来たり仰せて云ふ、「院の申さること有るに依りて、母宜しからずと雖ども、宣旨を下さる。冷泉院の五六宮なり」てへり。

三日、丙戌、举直朝臣を以つて、事の由を彼の宮に申さしむ。禄有り。

これは前稿では取り上げていない、寛弘元年五月条からの引用。「華

山院宮達」は、昭登親王と清仁親王。「実成朝臣」は、藏人頭藤原実成。天皇の使者として、親王宣下を道長に伝えたのである。その仰せによれば、花山院の申請によって、「宮達」の母の身分は低いものの、「冷泉院」の第五・六親王とするとのこと。『日本紀略』の五月四日条には、「以冷泉院皇子昭登・清仁為親王。実花山院御出家之後産生也」（冷泉院の皇子昭登・清仁を以つて親王と為す。実は花山院御出家の後の産生なり）とみえる。『栄花物語』（初花）によれば、

院この宮たちの忍びがたくあはれにおぼえたまへば、中務が腹の一の御子、女の腹の御子二宮を、殿に申させたまひて、「これ冷泉院の御子のうちに入れさせたまへ」とある御消息たびたびあれば、と、花山院から道長に要請があつた。道長もその親心を思いやつて、「されば内裏に参らせたまひて、ことのよし奏せさせたまひて」、実現にいたつたとある。花山院との友好関係があればこそであろう。なお、寛弘元年のこととは限らないが、道長がこの二人の御子の「袴着」を祝う和歌を詠んでいる。関連する文事としてあげておく。

冷泉院の五、六の親王、袴着はべりけるころ、言ひおこせては  
べりける 左大臣

岩の上の松にたとへむ君ぎみは世にまれなる種ぞと思へば（『拾遺集』卷十八・1165・雑賀）

二人の親王は、世にもまれな出自、貴種であると讃える。新日本古典文学大系の注は、

此花非人間種、瓊樹枝頭第二花（『和漢朗詠集』卷下・671・親王、大江朝綱「名花在閑軒」）

此の花 是れ人間の種に非ず、瓊樹の枝頭第二の花（「名花閑軒

に在り」）を引いている。道長はこの二句を用いて、祝意を表している。

正月廿余日の程に、雨いみじく降るに、斎院より  
知るらめや日数のみふるながめには花の袂もただならぬかな（17）

詞書の「正月」は、年次に順つた配列を基本とするこの歌集においては疑問がある。13・14番が「四月一日」の、15・16番がこの月の「廿よ日の程」の、18・19番が「七月八日」の贈答歌であり、17番は「四月一日」と「七月八日」に挟まれている。その間のある日の詠歌でなければならぬ。この点について森川泰雄氏は、詞書と『御堂関白記』五月二十二日に記す天候、

廿二日、乙巳、從去夜子時許、通夜大雨下。從早朝天晴無雲氣。  
廿二日、乙巳、去にし夜の子の時許り従り、通夜大雨下る。早朝從り天晴れて雲氣無し。

との照合から、17番は選子が二十二日に送つた和歌と考えられた。前日は道長が故東三条院詮子のために開いた法華八講五巻の日に当たっている。斎院の初句「知るらめや」は、私の気持ちをご存じでしょうかの意。その心の内を、「花の袂もただならぬかな」とうち明けている。「花の袂」は、

少将三位、尼になりたまふに、殿より装束つかはすとて  
なれ見てし花の袂をうち返し法の衣を裁ちぞかへつる（『御堂関白集』61）

中宮の内侍、尼になりぬと聞きてつかはしける

加賀左衛門

いかでかく花の袂を裁ちかえて裏なる珠を忘れざりけん（『後拾遺集』卷十七・1024・雑三）

によれば、「法の衣」に対する宮女の華やかな衣服のことである。また、「世の中の、薄鈍（うすどん）など果てて、花の袂になりぬるも」（『栄花物語』見果てぬ夢）は、円融院の服喪期間が終わって、世の人の服装が平常の華やかなものに戻った場合についていう。選子は、今の齋院としての衣服を「花の袂」と呼んでいる。それが「ただならぬ」のは、涙のために濡れているからである。諸注はその理由を、齋院では仏事に加われない齋院の身を嘆いたからであろうと説く。十九日から道長が故東三条院の追善のために法華八講を催しており、この機会に、仏縁から遠ざかっている無念をうち明けたのである。道長には胸中を語る間柄であつたのだから。道長が返歌したか否かは、歌集に載せておらず分からない。

ここでこの五巻の日の模様について触れておく。

從華山院捧物十種給。為中清朝臣使。賜祿物。是山臥具、皆以銀作。從大内白合掛卅領。從中宮入瑠璃金百・生絹單衣合袴廿六給。使等有祿物。午時帥宮・右府・内府・春宮大夫・右大將・民部卿・右衛門督・源中納言・權中納言・勘解由長官・春宮權大夫・式部大輔・右大弁・三位中將・修理大夫・大藏卿等來。即打鐘入堂、講師登高座後、立捧物。自下僧兩階、王卿從下西對。列立之内、音声舟於堂南發物声。從同廊下融舟。二菩薩打一鼓出、從行道。廻中嶋三匝後、從上兩階、上達部・殿上人、佛前置捧物、諸大夫置庭中。此間樂舟來。在松二舟間。舞台來入中。此間舞童八人、取供華至階下。僧八人受之供佛。此童等退、為鳥舞了。舞青海波廻了後、行舟東西相分、尚有声。舞童入綾不止。馬場辺見物入來。從初立（『御堂閔白記』

五月二十一日）

華山院從り捧物十種を給はる。中清朝臣を使ひと為す。祿物を賜ふ。是れ山臥の具にして、皆銀を以つて作る。大内從り白の合はせの褂卅領。中宮從り瑠璃に入るる金百・生絹の單衣の合はせの袴廿六を給はる。使等に祿物有り。午時に帥宮・右府・内府・春宮大夫・右大將・民部卿・右衛門督・源中納言・權中納言・勘解由長官・春宮權大夫・式部大輔・右大弁・三位中將・修理大夫・大藏卿等來たる。即ち鐘を打ちて堂に入る、講師高座に登りし後、捧物を立つ。僧は兩階自り下り、王卿は西の對從り下りたり。列立する内に、音声の舟、堂の南にして物の声を發す。同じき廊の下從り舟を融したり。二菩薩一鼓を打ちて出で、行道に従ふ。中嶋を廻ること三匝の後、兩階從り上りて、上達部・殿上人、佛前に捧物を置き、諸大夫庭中に置きたり。此の間に樂の舟來たる。松二舟の間に在り。舞台來たりて中に入る。此の間舞の童八人、供華を取りて階下に至る。僧八人之を受けて佛に供ふ。此の童等退きて、鳥の舞を為し了りぬ。青海波を舞ひて廻り了りし後、行く舟東西に相分るるも、尚ほ声有り。舞の童入綾止まず。馬場の辺りに見物入り來たる。初め從り立ちたり。

と、華山院・一条天皇・彰子中宮から「捧物」が送られ、帥宮敦道親王・右大臣藤原顯光・内大臣藤原公季以下、上達部・殿上人らが多数集まるといふ盛大な法会であつた。その上、行道の際には、僧俗が庭前に列立するところで、「音声舟」が、殿舎の廊の下を流れる水路を経てやつて來た。そして、庭前の池で樂音を發したのである。さらに「二菩薩」——菩薩の面をつけ衣装を着ているのであらう——が「二鼓」を打ち出

して「行道」に従い、池の「中嶋」を三度めぐっている。この後上達部・殿上人は、「堂」にあがって「捧物」を佛前に置き、「諸大夫」は「庭中」に置いている。行道が終わってさらに法会はつづく。行道の間に「楽舟」が来た。二つの舟の間には「松」が位置したという。そして「舞台」が来て舟と舟の間に入った。「舞台」は、舞台を備えた舟ということであろう。松を背景にして舞台を設えたことになる。この間に「舞童」八人が「供華」を持って堂の階下に入り、僧八人がこれを受け取って佛に供えている。童らは退いて、設えたばかりの舞台で「鳥舞」つまり迦陵頻の舞を舞った。迦陵頻は四人の舞。そして「青海波」を舞っている。二人の舞である。通常は「輪台」を序とし、つづけて「青海波」を破として舞うのであるが、「輪台」は四十人の垣代が大輪を作る大がかりな舞であり、舟の上の舞台には合わないために省略したのである。「青海波」が終わって音楽を演奏していた「東西」の「二舟」は離れていったが、それでもなお音楽はつづいた。一方舞を終えた童らも、「入綾」——舞終わって退場するときに、ふたたびその曲を奏すると、舞ながら後ろ向きに退くこと——を終えていなかったとある。この日は、法華八講の最も重要な仏事である、五巻の日ということもあって、舞樂を行うなどして趣向を凝らした催しとなっている。道長政権擁立に当たって尽力した、姉詮子への感謝とともに、自らの威勢を内外に示す華やかな事業であつたと言えよう。

## 六月

四日、丁巳、不天晴。右大弁許送紙、令書本。頼通料耳。

について、前稿で、藤原行成に料紙を送って、子息頼通のために本を書かせた、何の本かは不明と述べた。これに対して、佐藤道生氏から、この本とは、「右大弁樂府の上巻を新たに書いて持ち来たる」(九月七日)、「右大弁樂府の下巻を持ち来たる」(同月十五日)によって、白居易の「新樂府」のことと考えるべきであるとのご教示を得た<sup>8)</sup>。従うべき見解である。学恩に感謝する。

## 七月

七日、己丑、能通朝臣非時。

に関連して、道長は不調によって、七日の内裏での作文会に参加できなかったと述べた。これは、『御堂関白記』によれば正確ではないので、訂正する。二日法興院から帰って、「亥時許忽惱霍乱。心神不覚、通夜辛苦」(亥の時許りに忽ちに霍乱を悩む。心神不覚にして、通夜辛苦す)と急に「霍乱」となり、一晩中苦しんだ。翌三日も、「終日尚悩」(終日尚ほ悩む)、「雖有惱氣重、……」(惱気重きこと有り)と雖ども、……と苦痛はつづいた<sup>9)</sup>。そして四日になって、「心地頗宜」(心地頗る宜し)と回復した。そうであれば、作文会に行っても支障はなかったであろう。それでも行かなかったのは、三日に自邸で始めた法華三十講にしなければならなかったからなのであろう。

『御堂関白集』の和歌を取り上げる。

七月八日まだつとめて、齋院より、竜胆<sup>りゅうたう</sup>の露いみじう置きたるに、まだ御殿籠りたるほどに

露置きてながむるほどを思ひやれ天の河原の暁の空（18）

#### 御返り事

天の河明け行くほどの露けさにいづくも同じ空をながめて（19）

七月八日つまり七夕の早朝、まだ眠りについているときに、齋院から、露がしとどに置いた「竜胆」とともに和歌が送られてきた。齋院の歌は、花については何も触れていない。この点は道長も同様であり、織女と牽牛が天の河原で別れる時の涙を、「露」に喩えて詠んでいる。両者の「ながむる」「ながめて」は、明けてゆく天の河原の空を眺めるのであり、物思いに沈む心境を表した語である。齋院は、この織女の心中を思いやっつてほしいと語りかけ、道長は、二人の別れに涙するのは、どこでも同じなのですと、共感を告げている。ところで、この二首は齋院と道長のやり取りとみて内容を述べたが、齋院が送った相手は、中宮彰子とその女房らとする見解もある。<sup>(10)</sup> どちらの解釈もありうるだろう。別れのつらさと噛みしめる、織女の心情を思いやっつてほしいという語りかけと、みなそうなのだと応じるやりとりは、女性同士の贈答とも言えるだろう。四月一日の歌（13・14）のように、そのときどきの風情を詠み、心の内を寄せる関係が両者にあったと捉えることができるので、齋院の道長への贈歌とも考えてよいのではないか。『御堂関白記』の七月七日条には、「能通朝臣非時」——「非時」は僧の食事。淡路守藤原能通が奉仕した——とのみあり、三日に始めた法華三十講に加わっている。翌

八日は、前稿（上）に取り上げたとおり、自邸の「堂」で『法華文句』を読んでいた。前日の宮中における作文会に出席せず、七夕の情趣を詩歌に表さなかったのだが、その後朝に、思いがけず織女の心情を描くことになったのである。

引きつづき八月以降の記事について注解を行う。

#### 八月

二日、甲寅、所読華句文十巻点了。覚運僧都送布施絹十四・米二十石。二日、甲寅、読む所の華句文十巻に点じりぬ。覚運僧都に布施の絹十四・米二十石を送る。

「華句文」は、天台宗の祖である智顗<sup>ちぎ</sup>の著した『妙法蓮華經文句』（『法華文句』）。七月八日条に、「文句遺巻読」とあって、これ以前から読みつづけており、八月二日に読了した。「点」は、読解のために、漢文にヲコト点・訓仮名などを付けること。七月八日にもあったように、「覚運僧都」の指導を受けつづけていた。絹・米を送るのはその謝礼である。『続本朝往生伝』（「権少僧都覚運」）には、「左相府三十講、常為二証義者、諸宗章疏悉皆暗誦」とあるので、七月の法華三十講に「証義者」として奉仕し、その間道長に『法華文句』を講じていたのであろう。覚運（九五三〜一〇〇七）は、延暦寺の僧。道長の信頼が厚く、この年の五月十九日から始まる法華八講に、講師として召されている（『御堂関白記』）。同日条によれば、覚運は、「断公請三十余年、此度出来、

是衆人感所耳」（公請を断つこと三十余年、此の度出で来たる、是れ衆人の感ずる所のみ）と、朝廷が法会に召しても長く断つていたにも関わらず、今日出仕したことに人々は感じ入ったという。道長の求めには応じたことを強調しているのであろう。また道長は同月十七日には、「不断念仏」に参会するために延暦寺に赴き、「覚運僧都房の房」に泊まっている（同記）。覚運は寛弘四年十月に入寂する。その四十九日の法会に当たっては、「供仏施僧之資貯、専任東閣之芳意」（『本朝文粹』卷十四・426、大江以言「為覚僧都」卅九日願文」）によれば、仏への供え、僧侶への施しは道長の「芳志」にもとづくとある。師恩（『続本朝往生伝』）に報いようとしたのであろう<sup>(12)</sup>。

二十日、壬申、内奉群書十帖五十卷。罷出。  
二十日、壬申、内に群書十帖五十卷を奉る。罷り出づ。

「内」は一条天皇。「群書」は『群書治要』のことという（『御堂関白記全註釈』）。『群書治要』は、初唐の魏徵らが太宗の勅により、諸書から治世に有用な箇所を抜き出しまとめた書。次の例から分かるように、帝王学の書としてこれまで読まれてきた。

群書治要五十（魏徵撰）（『日本国見在書目録』・雑家）

天皇御「清凉殿」、令「助教正六位上直道宿禰広公」読「群書治要第一卷」。有「五経文」故也（『続日本後紀』承和五年六月二十六日）

頃年天皇読「群書治要」。是日御読竟焉（『三代実録』貞観十六年閏四月二十八日）

先「是天皇読」群書治要。参議正四位下行勘解由長官兼式部大輔播

磨権守菅原朝臣是善、奉「授」書中所「抄納」紀伝諸子之文。從五位上守刑部大輔菅野朝臣佐世、奉「授」五経之文。……（同十七年四月二十五日）

寛平遺誡、雖「不」窮「経史」、可「誦」習群書治要「云々」（『禁秘抄』卷上・諸芸能事）

昌泰元年二月廿八日戊戌、於「清凉殿」、始読「群書治要」（年十四。侍読式部大輔紀長谷雄朝臣、尚復大内記小野美材）（『大鏡』裏書卷一・醍醐天皇御事）

若有「御読書事」、預定「其書并博士尚復」（旧例……群書治要、或用「明経紀伝各一人。……」（『新儀式』卷四・御読書事）

学問を好む天皇のためであるとともに、天皇が身に付けるべき学問の書として奉呈したのであろう。左大臣のなすべき役目と心得た上での行為と言えるのではないか。

二十三日、乙亥、天陰。有雨氣。早朝宿衣参内。春宮女一宮御着袴。御装束事等行。後就陣。去年不堪佃事。申時許、諸卿共参春宮。西時有着袴事。依召参御前。大夫召之。御袴奉結後出殿上。此以前両三巡。召御前人々、両三献後、大夫取盃。有和歌事。了賜祿物。大樹。大臣御衣。余本筥二合、入道風手跡。御馬一疋給。後取筥、再拝退出。参上達部、右府・内府・大夫・右大将・民部卿・藤中納言・右衛門督・中宮権大夫・侍從中納言・勘解由長官・権大夫・左大弁・右大弁・修理大夫・三位中将・大藏卿。

二十三日、乙亥、天陰<sup>くも</sup>。雨氣有り。早朝宿衣にて参内す。春宮の女一宮の御着袴なり。御装束の事等を行ふ。後に陣に就く。去年の不堪佃



の事あり。申の時許りに、諸卿と共に春宮に参る。酉の時に着袴の事有り。召しに依りて御前に参る。大夫之を召す。御袴を結び奉りし後、殿上に出づ。此れ以前に両三巡あり。御前に人々を召し、両三献の後、大夫盃を取る。和歌の事有り。了りて禄物を賜ふ。大掛なり。大臣に御衣。余は本の筥二合。道風の手跡を入る。御馬一疋を給ふ。後に筥を取り、再拝して退出す。参れる上達部は、右府・内府・大夫・右大将・民部卿・藤中納言・右衛門督・中宮権大夫・侍従中納言・勘解由長官・権大夫・左大弁・右大弁・修理大夫・三位中将・大藏卿。

この日は宿直装束のまま参内している。「春宮」居貞親王——後の三条天皇——の「女一宮」当子内親王（一〇〇一〜一〇二三）の袴着（裳着）に列席するためである。当子の母は、藤原城子。「御装束事」は袴着を行う場の設え、室内の装飾である。『西宮記』（臨時七・内親王着裳）には、「撤<sub>二</sub>昼御座、鋪<sub>二</sub>毯代立<sub>二</sub>大床子<sub>一</sub>（垂<sub>二</sub>母屋御簾<sub>一</sub>）。北御障子、敷<sub>二</sub>錦端疊四枚<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>親王座<sub>一</sub>。……北二間立<sub>二</sub>四尺御屏風二帖<sub>一</sub>などとある。道長はその後、陣の座で、去年の不堪佃田の定めを行ってゐる。そして、「申時」ころに「諸卿」とともに「春宮」のもとに参上し、「酉時」に「着袴事」とある。そして春宮の召しにより御前に参上した——召しを伝えたのは、春宮大夫藤原道綱、道長の腹違いの兄——。春宮のもとにより、腰結いを勤めるためである。腰結いは、女子が成人して、始めて裳を付ける儀式の際、腰の紐を結ぶことであり、その役のことでもある。皇子女の場合、時の大臣が勤めるのが恒例。記事の中の「申時許、諸卿共参<sub>二</sub>春宮<sub>一</sub>」は、同じく袴着を書きとめた『小右記』によれば、

右大臣以下、指せる喚し無しと雖ども、左府伏座にして気色を指示したり。仍りて諸卿相率<sub>あひ</sub>て宮に参れり。

と、「右大臣」藤原顕光以下の「諸卿」にお召しはなかったのだが、道長が意向を示したので、みなが従ったのだという。公卿らをこのように従わせることができるのだと、おのれの権威を春宮に誇示する目論見を潜めていたのではないだろうか。また、「召<sub>二</sub>御前人々<sub>一</sub>、両三献後、大夫取<sub>レ</sub>盃」は、春宮が御前に人々を召して、春宮大夫道綱が盃を取って飲んだということである。これも『小右記』には、

両三盃の後、諸卿を御前に召し、衝<sub>つ</sub>重<sub>おも</sub>を給ふ。最後の盃は大夫道綱、左府出づべき由を仰せたり。

酒宴の締めくくりとして、道綱が盃を取るようにと道長の指示があった。春宮大夫としての職務であつたのか、異腹の弟ながら左大臣である道長の配慮であつたかのどちらかであろう。ここは、『小右記』を併せ見ることによって、『御堂関白記』だけでは読み取れない、道長の威光や人と人とのやり取りの機微がうかがえる一齣と言えらる。この後、「有和歌事」（『御堂関白記』）、「卿相説和歌之間、有給禄（卿相和歌を読む間、禄を給ふこと有り）」（『小右記』）と歌会に移っている。この時の和歌は残っていない。道長は禄として、「余は本の筥二合、道風の手跡を入る」と、小野道風の「手跡」をたまわっている。『小右記』には、「左大臣殊に贈物を給ふ（手本と云々。筥に納め物を裏む）。大臣庭中に進み、拝礼を致す」とある。「道風」は、小野道風。『天徳三年關詩記事略記』に、

木頭小野道風者、能書之絶妙也。羲之再生、仲将独歩。施<sub>レ</sub>此屏風、書<sub>二</sub>彼門額<sub>一</sub>。处处莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>盡、家家莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>珍者也。仍<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>一朝

之面目、為三万古之遺美<sup>一</sup>。

と讃えられており、三蹟の一人としてその書が珍重されている。たとえば、『小右記』寛弘二年四月十七日条によれば、藤原実資が藤原公任の「愛子金石」に「道風の手跡一卷」を与えたところ、「金吾涕泣する」と雨の如し。愛憐の甚だしさ、附属の詞敢へて云ふべからず」と、公任は感激の涙を流したという。このほか、道長の正室藤原倫子の母穆子が、孫の妍子中宮が生んだ禎子内親王と対面した時に、

また道風が本など、いみじき物どもの、銀、黄金の筥に入りたるなどをぞたてまつらせたまへる（『栄花物語』つぼみ花）

と、道風の書を贈っている。また寛弘八年八月十一日に、三条天皇が東三条第から新造内裏へ遷幸する際、道長からの「贈物」に、「野剣、御筥二合、一合は唐の本、一合は日本の本道風」（『小右記』）があった。さらに寛仁二（一〇一八）年十月二十二日に、後一条天皇が土御門第に行幸した折、これも道長からの「御送物」に、「道風の二卷・佐理の書・唱和集の筥」（『御堂関白記』）があった。

注

- (1) 杉谷寿郎「御堂関白集の性格」（『平安私家集研究』一九九八年十月・新典社、所収）、妹尾好信「『御堂関白集』読解考——第一歌群・寛弘元年詠の部——」（『国文学研究資料館紀要』第二十六号・二〇〇〇年三月）、平野由紀子「私家集研究の現在——御堂関白集——」（平野由紀子編『平安文学新論』二〇一〇年三月・風間書房、所収）、同『御堂関白集全釈』（二〇一二年三月・風間書房）

- (2) 注(1)の妹尾氏論考参照。

- (3) 注(1)の平野氏論考と著書参照。

- (4) この頃の道長と花山院との良好な関係については、前稿(上)でも触れた。

- (5) 『和漢朗詠集』（卷下・親王）には先の引用につづいて、同題の「此花非<sup>二</sup>是人間種<sup>一</sup>、再養<sup>二</sup>平台一片霞<sup>一</sup>」（672・菅原文時）がある。前句は671と同じであり、道長はこの詩も承知していたのであろう。

- (6) 森川泰雄「『御堂関白集』詠歌年時小考」（『王朝細流抄』第三集・一九九九年三月）参照。

- (7) 『拾遺集』（卷二十・哀傷）の、

女院御八講捧物に、金して亀の形を造りて、詠みはべりける

齋院

業<sup>ふか</sup>尽<sup>くす</sup>御手洗<sup>みたちし</sup>川の亀なれば法の浮木<sup>のうき</sup>に会はぬなりけり

は、この詮子追善の法華人講に当たって、仏法に関わるわけには

行かない我が身を嘆く歌と言われている。所京子「大齋院選子の仏教信仰」（『齋王和歌文学の史的研究』一九八九年四月・国書刊行会、所収）参照。ただこの詞書から、寛弘元年五月に道長が催した八講に際して詠じた歌かどうかは定かではない。女院詮子が八講を催したとも解しうるからである。詮子は、

皇太后宮、於「東三条」、被「行」御八講云々（『小右記』正暦元年十二月八日）

早朝参院。……亦参院。御八講也（『権記』長保三年九月十四日）

と、しばしば法華八講を行っている。ただし、この歌は哀傷に分類されているので、詮子を追善する八講なのかもしれない。しかし、詮子も「皇太后修「法華八講」。訪「先妣菩提」」（『日本紀略』。右の『小右記』の記事と同じ時の八講）と、亡き母藤原時姫の菩提を弔うために開いている。この時の歌である可能性もある。年次の比定は容易ではない。また、

賀茂の斎と聞こえけるととき、西に向ひて詠める

選子内親王

思へども思むとていはぬことなればそなたに向きて音をの

みぞ泣く（『詞花集』巻十・410・雑下）

は、忌みがあつて仏の御名や経文の一節を口にするわけには行かない、ただ西に向かつて泣くだけであると訴えている。齋院が仏法を希求する思いを抱えていたことは、この歌によっても確認できる。

（8）佐藤道生「藤原道長の漢籍蒐集」（佐藤道生編『名だたる蔵書家、

隠れた蔵書家』二〇一〇年十月・慶応大学出版会、所収）、「藤原道長の漢籍収集」（『国宝の美』44 書籍3）二〇一〇七月・朝日出版社、所収）参照。

（9）『小右記』の同日条には、

早旦読経僧云、左府自「去夜」、俄被「重煩」者。次相公示送。

「日子尅許、如「霍乱」被「悩」云々。……相俱参「左府」。左府以「

左頭中将」、被「言出」云、自「子丑尅許」、如「霍乱」病悩。嘔吐

無「隙」、今間嘔吐止。然而心神極悩、無力殊甚。仍不「能」相

遇。太「恐」申者。

とあり、昨夜から「霍乱」となつて絶えず「嘔吐」し、「嘔吐」

が止まつても「心神」の苦痛はつづき、「力」が出ず対面は叶わ

ぬと語っていると聞いたと、病悩の有様を書きとめている。

（10）前者は妹尾氏の論考、後者は平野氏の注釈書と論考による。ともに注（1）に挙げた。

（11）『権記』の長保三年三月十日条に、

此日内供奉源信・覚運等可「叙」法橋上人位。件等人年来有「

宿願」、都不「出仕」。依「御願」無「止」、綸旨慇懃。仍今日共参入。

為「励」其情、並有「此恩」也。

とあり、ここでも長い間出仕していなかったことを述べている。

（12）この願文にはその悲しみを、「弟子涕淚流而無「停」、迷「倒」雲漢

於眼下」、心肝屠而不「静」、如「吞」風胡於胸中」（「弟子」は寿懷）

と語り、覚運の教化が、「善男善女、或尊或卑、受「其法施」、殖「

其良因」之者、大「半」於天下「矣」と広く及んだと述べている。ちな

みに、藤原行成は、覚運の卒去を知って、「仏法棟梁、国家珍

宝也。今聞「逝去」、悲涙灑<sup>レ</sup>襟云々」（『権記』寛弘四年十一月一日）と悲しみの涙を流している。

（13）袴着の儀に列席していた藤原行成は、「東宮の女一の御子、御著袴の事有り」（『権記』）と記すだけである。

（14）「義之」は晋の王羲之、「仲将」は梁の韋誕のこと。ともに能書として知られる。

キーワード：藤原道長、文事、御堂関白記、御堂関白集、寛弘元年、注  
釈